

## 税金という社会の力

札幌市立上野幌中学校 2年 千葉 あかり

私には四歳の妹がいる。歌と踊りが大好きで、いつも外で遊ぼうと私の腕を引っ張ってくる活発な女の子だ。でも、そんな妹は先天性小腸閉鎖症という疾患を持って生まれてきた。妹は生まれた翌日に、生き延びるため大きな手術を受け、その後も集中治療室で、三ヶ月以上に及ぶ長い入院生活を送った。当時小学四年生だった私は、生まれた日に抱いたきりの小さな妹の姿を思い出しては、長く帰ってこないことを寂しく思っていた。退院後、妹は定期的な通院を重ねながら順調に成長し、今年の春には幼稚園に通うことができるようになるまで回復した。

中学生になった頃、ふと数年前の妹の治療費はどれくらいかかったのか気になり、母に尋ねてみた。母からの回答は、「子ども医療費助成制度のおかげで、ほとんどお金はかかっていない」という驚くものだった。母は当時を振り返り、「あの時、命が助かるか分からない、もし助かってもどこまで回復するか分からないという精神的に追いつめられた状況で、お金の心配をする必要がなかったことにはとても救われたよ。経済面だけでなく、気持ちの面でも救われた。」と語ってくれた。

母の話聞いて、国の医療費の助成について興味をもったので調べてみることにした。まず、国の医療費の助成は私達が日々納めている税金が収入源であり、国の支出における社会保障の分野に属することが分かった。その中に、国民全員が加入する公的医療保険制度があり、それによって、私達は医療費の助成を受けられていることを知った。この国民皆保険制度がいつできたのか調べてみると、昭和三十六年に実現したことが分かった。私の祖父母が今の私と同じくらいの年頃の時のことで、意外にも最近のことなのだと驚いた。祖父母が幼かった頃、病院にかかるためにはたくさんのお金が必要で、今のように気軽に病院に行くことはできなかったのではないだろうか。今の私達は具合が悪くなった時に、すぐに病院で必要な治療を受けることができる。それはとても恵まれていることなのだと改めて気がついた。私達の豊かで安心した暮らしは、税金に支えられているのだ。

妹のお腹には、今でも手術の大きな傷跡が残っている。それは彼女が頑張った証であると同時に、税金という社会の力が妹を救ってくれた印でもあるのだと思った。

社会は時代と共に変化していく。おそらく税金の在り方も時代と共に変化していくのだろう。でも、どんなに社会が変わっても、私の妹が救われたように、税金は私達の生活を守り、支え、社会をより良くするために使われていくことを願う。そのために、私には何ができるのか考え、行動していきたい。